

仲間の回復物語

「これでいいんだ」

イツキ(22歳、大麻)

できることなら、この人生を終わらせたい。

高校生になった頃から時々、そう思うことがあった。

18歳の時、仲が良かった友人たちから、一緒にやろうと、大麻を差し出された。平然を装い、大麻を手にとった。仲間外れにされるのが嫌だった。正直、怖かった。

初めて使った大麻は、とても魅力的だった。来る日も来る日も先輩から受ける暴力。厳しい母親の顔色をうかがいビクビクして過ごした子ども時代の記憶…。「ちゃんとしなさい」。そう言われ続けてきた。ちゃんとしなきゃ。いつからか、そう思うようになった。正直、苦痛だった。

そんな思いすべてから解放された気がした。自由を感じた。人生で初めてのいい出会い。そんな気がした。1回で大麻のとりこになった。

それから大麻中心の人生が始まった。大麻を買うために、親をだまし、友人をだまし、家の物を片っぱしから売り飛ばした。母親は狂ったように怒っていた。悲しんでいた。

「もうやらない。本当にゴメン」。何回も母に言った。もうこれで最後。残り的大麻がなくなったら本当にやめよう。だが、夜になると大麻を楽しみに売人の所へ向かう僕がいた。家に帰れば、静まり返った我が家、悲しそうにうつむく母。僕はすぐに部屋にこもり、大麻を吸った。

「何やってんだろう、俺」

そんな僕を見かねた母が、精神科に行こうと言ってきた。抵抗はしなかった。自分でも、自分のおかしさにどこかで気付いていた。何よりも、母親の悲しむ顔を見

るのがつらかった。

でも、薬は止まらなかった。入院もしたが、退院すればすぐに元の生活に逆戻り。薬を手に入れるために、父親が昔から大切にしていたバイクにまで手を付けた。

その後、家族に無理やり連れていかれた精神科病院で、医師から強制入院だと言われた。入院中に母が薬物依存の本を差し入れてくれた。自分とよく似ていた。

医師からダルクを紹介され、山梨ダルクへ行くことに。だが何回も飛び出し、半年たったところで退寮した。もう一度、地元でやり直す。そう決めていた。

地元に戻り、仕事と住む場所を見つけた。昔の友人にも会った。うまくいったと思った。でも気づいたら、使いたくなかった大麻を使っている自分がいた。まるで誰かに操られているような感覚。「まさか俺が依存症?」。そんな恐怖も頭をよぎった。

そのうち仕事に行けなくなり、住んでいた会社の寮から追い出され、野宿をするまでになった。

ひたすら大麻を吸い続けた。どうにもならない。絶望だった。悲しくなった。たくさん泣いた。

「もういいかな。楽になりたい」

野宿生活を始めてから1週間たったある日、僕が野宿をしている場所に警察が来た。「助けに来たぞ」。自然と涙が出てきた。「やっと終わった」。冷たい手錠。ホッとした。

このまま社会にいても、生きていけないと思った。使いたくなかったのに使った自分が怖くなった。認めたくなかったけど認めざるを得なかった。

俺は狂ってる。自分は病気だ。

逮捕されて強くなった思い。令和元年10月7日に保釈され、山梨ダルクに助けを求め、2度目の入寮をすることを決意した。あれから1年が経った。

令和2年10月7日。

仲間の皆に、1年のバースデー(※)を祝ってもらった。

たくさん仲間たちに愛してもらった。こんなに愛してもらったことは、今まで一度もない。人への甘え方も分からなかった自分だけれど、いろいろな人たちに支えられ、助けられた。あれだけひどかった自分が、1年も薬が止まっている。

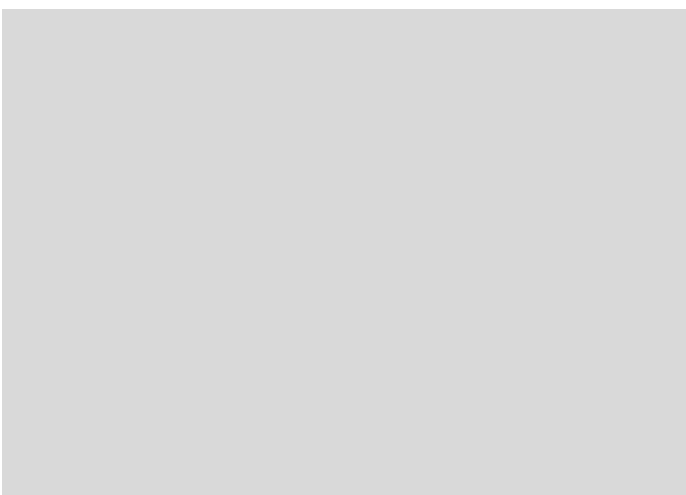
「これでいいんだ」
埋められない何かを抱え続けてきたが、そう思えるようになった。
あの時、警察に通報したのは母親だったと、後から知

った。あの時、警察が来ていなかったら、どうなっていたらろう。
今は母親に言いたい。
「ありがとう」

(※)薬物が止まって1年が経過したこと

「絶望の淵から、今」

タケシ(43歳、覚醒剤)



絶望の中にいた。「どん底」と呼ばれるその場所で、一人もがき苦しんでいた。

令和元年6月18日。

人生で初めての逮捕。罪名「覚醒剤取締法違反」。何もかもが初めての経験だった。

鍵のかかった鉄格子で閉ざされた、薄暗く小さな部屋。名前で呼ばれることなく番号で呼ばれ続ける毎日。罪の重さを伝えるかのように重く、そして冷たく両手にかかる手錠…。その一つ一つが、僕をさらなるどん底へと突き落としていった。

厳格な教育家庭に生まれ育った。3人兄弟の真ん中。デキの良い兄と弟に挟まれ、厳しい父から怒られるのは、いつも僕だった。

テストの点が悪いと殴られた。成績表がひどいと蹴り倒された。「お前はオレの子じゃない」。そう言って木製バットを振り上げられた時には、震えが止まらず、声を出すことさえできなかった。

着ている服を脱がされ家を追い出されるたびに、大声で叫んだ。ありったけの力を振り絞り叫び続けた。

「ごめんなさい。僕が悪かった。今度はちゃんとやるから」

いつの間にか、「ごめんなさい」が僕の口癖になっていった。

悪いのは全部僕なんだ。

兄弟のようにできない僕がいけないんだ。

兄弟に対しての劣等感、そして、そこから生まれる罪悪感。そんな感情を持ちながら僕は育っていった。

大人になっても、そんな感情が消えることはなかった。会社経営を生業にしても、高級車や家を手に入れても、結婚しても、2人のかわいい子どもたちに恵まれても、何をしても消えてはくれなかった。

劣等感、罪悪感、そして、どんなことをしても満たされない空虚感…。

そんな毎日に疲れ果てていた。

そんな毎日が苦しかった。

そんな毎日から逃げ出したかった。

きっと限界だったんだろう。僕は覚醒剤を自らの意志で使った。何のためらいもなく。すぎる思いさえ、そこにはあった。「助かった」。使った時、そんな気持ちになったのを今でも覚えている。

懲役1年6月、執行猶予3年。

判決を聞いたその足で、ダルクへとつながることになった。家庭や仕事、大切な物すべてを失い、僕は一人山梨に来た。

もうどうでもよかった。夜毎見る子どもたちの夢。涙を流しながら起きるたびに思った。

「もうこの人生を終わりにしたい」

現実を受け入れることさえできずに苦しい毎日だった。

そんな時、手を差し伸べてくれたのは仲間たちだった。常に寄り添ってくれた。心の痛みや苦しみに共感してくれた。いつも隣にいてくれた。

仲間たちに支えられ、いつしかその仲間たちの輪の中で、劣等感も罪悪感も持つことなく、ありのままの自分自身と一緒に笑い合っている僕がいた。

仲間たちが僕に教えてくれた。

「僕は一人じゃないんだ」と。

人生の絶望の淵から救ってくれたのは、仲間たちと、仲間たちが手渡してくれたこのプログラムだった。とても感謝している。

今度は僕が、いまだ絶望の中で苦しんでいる多くの仲間たちに、このフェローシップ (分かち合い) とプ

ログラムを手渡していきたい。それを僕の新しい人生の役割としてやっていきたい。そんな夢を持つこともできた。

あの日、確かに僕は絶望の中にいた。

その「絶望」が今は…「希望」へと変わった。

「希望へ駆け出す」

イツサ(40歳、覚醒剤)

俺の絶望は、生まれた時から決まっていたようなものだった。

物心ついた頃から、両親のケンカ、父親の母親への暴力…。俺が幸せと呼べる人生、生活は、この40年間、一度も訪れなかった。

地獄のような絶望の日々が始まったのは、小学1年の時からだ。

父親が覚醒剤を使って逮捕されたことで、知らない町、知らない学校へ行くことになった。

緊張で押しつぶされそうだった。それでも俺は、新しい学校で友達をつくるのに一生懸命だった。そして、一人の友達と仲良くなったのだが、その友達が万引きしているのを見てしまった。その頃の俺は正義感があった。だから友達を注意した。それから人生が狂い始めた。

最初はその友達の暴力から始まった。怖かった。生まれて初めて受ける暴力。恐怖に耐えられず逃げ出した。なぜか万引きが俺のせいになっていて、同級生全員が俺と話してくれなくなった。「ドロボー野郎」と言われ、また逃げた。

心の中で叫び続けた。「俺じゃない」「俺は何も悪くない」。心の中で泣いた。それから人が怖くなった。

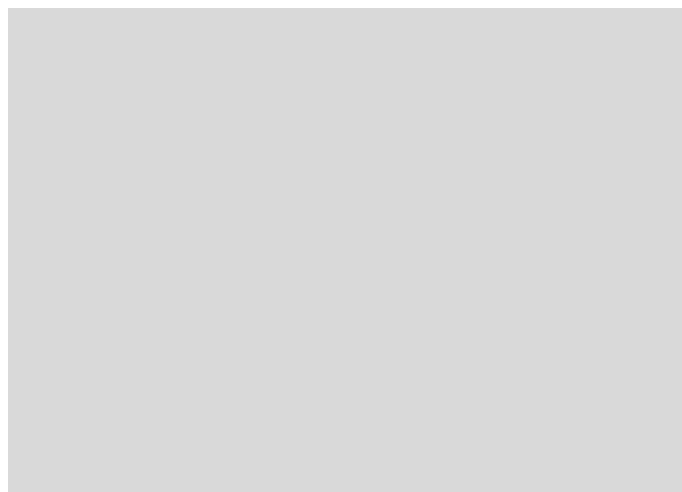
状況はさらに俺を追い詰めた。学校の担任が、俺が万引きをしたと母親に伝えたのだ。

今度は母親からの暴力が始まった。あれだけ大好きだった、優しくった母親から殴られる毎日。会話もない毎日。「産まなきゃよかった」。そう言われ、自分は生まれてきてはいけない存在だと思った。心が休まる時はなかった。

「助けてくれ、助けてくれ」

心の中で毎日叫び続けた。神様に願った。だが神様は俺を見捨てた。誰一人として俺の味方はいなかった。

小学5年の時、両親が覚醒剤で逮捕された。「俺のこ



とが大事じゃないから、いなくなったんだ」。ずっとずっと耐え続けてきたが、俺の心は、体はボロボロだった。何も信じられなくなった。生きていくことがつらすぎた。

こんな人生なら死のう。

自殺しようと、俺は海に入った。ところが、あと一歩のところまで止められてしまった。

死ぬことができなくて、俺は必死に考えた。弱いからイジメられる、弱いから暴力を受けるんだ、強くならなくちゃ。今度は暴力で生きていこうと決めた。悪い事だけをしていこう。自分の人生なんてどうでもいい。「こんな世の中だから」と恨み、憎むようになった。どんどん歯車は狂っていった。暴力で人を支配し、暴力団員へと変わっていった。

そして、覚醒剤との出会い。嫌なこと、つらいことが忘れられた。弱い自分を隠すことができた。だが、子どもの頃からずっと抱えてきた思いは消えなかった。

このまま生きていても意味ない。生まれてこない方がよかった…。

「薬を使っている俺なんてどうせ何の価値もない。生きている価値もない」と、自分の殻にもっと閉じこもるようになった。俺の人生はこれ以上どうにもなら

ないぐらい、絶望へと変わった。

小5のあの時、死んでいれば、どれだけ楽だっただろう。

人を傷つけ、人から傷つけられ、人をだまし続け、人からだまされ続け、4度の刑務所生活。人生のどん底を何度も味わった。

4度目の刑務所から仮出所し、山梨ダルクへ。「仲間、仲間と言いながら、最後は裏切るんだろ？」

最初は何もかも信じられなかった。どう思われるか怖くて、嫌われるのが怖くて、裏切られるのが怖くて、誰ともしゃべれなかった。そんな俺に、いつも真剣に、まっすぐに向き合ってくれる仲間がいた。

「俺たちにはプログラムがある。今まで出会ってきた連中と俺たちを一緒にするな」「どんなに離れても関係性は変わらない。俺たち仲間だろ」。仲間の言葉に泣いた。救われた。

人を信じるとはどういうことか、人にどう甘えたらいいのか、愛情とはどういうものなのか。何も分からなかった俺が、仲間の支えと導きで、いかに仲間とプ

ログラムが大事なのか知ることができた。

自分はどういう人間で、これから何をしていけばいいのか。仲間との会話の中から分かろうとしている。今がありのままの俺かはまだ分からないけれど、過去とは180度違う。

それは、ろくでもない人生を送ってきた俺に共感してくれる仲間に出会え、人を信じられるようになる素晴らしさに気づくことができたから。それは、笑いのある人生が一番いいと気づくことができたから。過去、心から笑ったことがなかった。一度たりともうれしいこと、楽しいことがなかった。今は、新しく来た仲間から相談され、その仲間が変わっていく姿を見ることが何よりもうれしく思う。

もう強がる必要はない。もう薬なんていらぬ。もう死にたいとは思わない。山梨ダルクが、仲間たちが、俺の人生を変えてくれた。

絶望のどん底にいた俺が、今は希望の光を感じている。そして、仲間たちと希望の光を目指して走り出している。